8:34
ピース敗北！？
プリキュア改造計画

キュアピースは　果敢にも　アカオーニに　一人で　挑んで　返り討ちに　あってしまったよ。
「まだ少々きついが、よくほぐしただけあって全部すんなり入ったオニ」
あわれにもキュアピースは、アカオーニの鬼チンポでおしりの穴を犯されてしまったよ。
「う…そ…奥まで…いやぁ…たす…け…」
「前の処女はピエーロ様のために取っておくとして、後ろでたっぷり楽しませていただくオニ」
ずぷずぷとピストンされて、キュアピースはとっても苦しそう。
「もういや…ゆるして…え」

「!?あ、いっ、あぎぃあああああああああああああ！」
いまにも泣き出しそうなキュアピースの指先から放出された雷は、勢いよくキュアピースのちくび　と　クリトリス　にめいちゅう！
「泣いて雷を出しても無駄オニ！お前のスマイルパクトは既に俺様に支配されてるオニ。放出された電流が全て自分の乳首とクリトリスに逆流するようにしてやったオニ！」
嬉しそうに笑うアカオーニですが、激痛に耐えるキュアピースにはまったく聞こえていません。
「ホラホラ、早く泣き止まないと雷が止まらないオニ」

ちょろろろろろ…
遂にキュアピースはおもらしをしてしまったよ。
「ガハハハハ！これはいい。これがプリキュアのションベンの臭いか」
「あっ…かひ…」
息も絶え絶えなキュアピースの身体から、どんどんバッドエナジーが溢れてくるよ。
「プリキュアの上質なバッドエナジーを捧げれば、ピエーロ様の復活もきっと近いオニ」
おしっこの臭いが辺りに充満してきたよ。

どうやらキュアピースは、自分の電流でイっちゃったみたい。腰をピクピクと痙攣させながら、無意識のうちにおしりをキュッと締め付け始めたよ。

「おお、この締め付け…」

更にメスの本能なのか、腰をゆるゆるとくねらせ始めたよ。

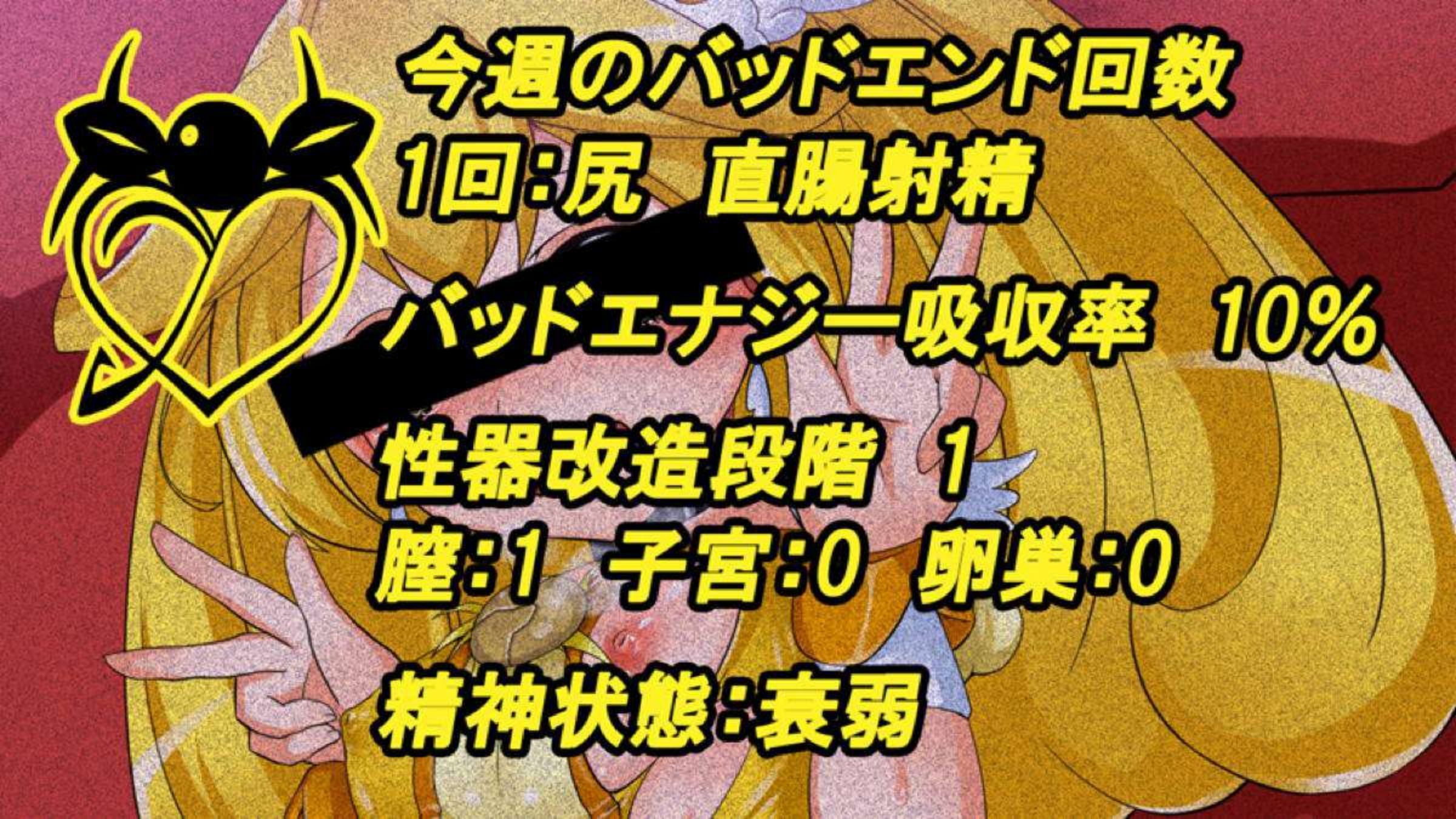
「格別な腰遣いオニ。尻をほじられてここまでになるなんて、コイツは天性の淫乱オニね。ピエーロ様への供物として申し分ないオニ」

プリキュアの身体は頑丈だから、アカオーニの鬼チンポでも全く裂けないんだ。凄いね！

「さて、そろそろ今回の目的を果たすオニ」
そう言うとアカオーニは、黒い絵具のチューブを握りつぶして、
「プリキュアよ！最悪の結末、バッドエンドに染まるオニ！
純潔の花園を黒く塗りつぶすオニ！」
おもらしをして痙攣しているキュアピースのおま○こに、グチャリ、と塗りつけた！
「はっ…ひはっ…あ…」
絵具はスパッツの繊維に染みこみ、処女膜を傷つけないように奥へ奥へと入ってゆくよ。

「ヒッ…やっ！やだっ、嫌ぁ！きもちわるっ…いい…！」
「自分の出したバッドエナジーで自分の身体を作りかえるオニ。
数週間もすれば完全にピエーロ様好みのスケベマンコになってるオニ。」
「そんなのっ！いっ…や…！」
「その間はこのケツ穴で、心の方を快楽漬けにしてやるオニ」
嫌がるキュアピースに反し、アヌスはギッチリキュウキュウとチンポを食い締めるよ。
「ッ！おっおっおっ…射精るオニィ！」「えっ、や、なに、ふるえて、ふくらんっ、でっ」
「ああああるるるるるるるるるなかっゅ、おしりぱぷぴちゃッ！
トロっとした、の、きて、ひっ、あ、や、え、あつっ、い、
ぶわっ、マンコ！ふわっ、ユ、ケ、ツ、ユ、ケ、ツ、ス、チ、ュ、ウ、ッ！スピッ！ゴポッ、ぶぽ…

「ふぁ…は…なに……これ…」
「派手にイったオニね。それはお前の身体が快楽に負けて『バッドエンド』を迎えた証拠オニ」
「イった…？これが…イく…？」
「そうオニ。しっかり身体で覚えて、どんどんバッドエナジーを吸収するオニ。
そうすればどんどん気持ちよくなれるオニ」
（わたし…これからどうなるんだろ…）
（バッドエナジーに満ちた悪のプリキュア…誕生が楽しみオニ）


今週のバッドエンド回数
1回:尻　直腸射精
バッドエナジー吸収率　10%
性器改造段階　1
膣:1　子宮:0　卵巣:0
精神状態:衰弱

キセ　ヤヨイ　プリキュア

ショウゴウ

..アクムノハジマリ..

シンショクリツ

10%

ショジョ

チツ...キムスメ

シキュウ...ハナゾノ

ランソウ...ミジュク

アナル...ヒショジョ

チクビ...カンボツ

E.クビワ

E.バッドタール

E.ドウケコクイン

バッドエンド

ソウスウ

1カイ

8:33
洗脳開始！
刻まれた偽りの憎悪

プリキュアに新たな仲間、キュアマーチが加わって、しばらく後…

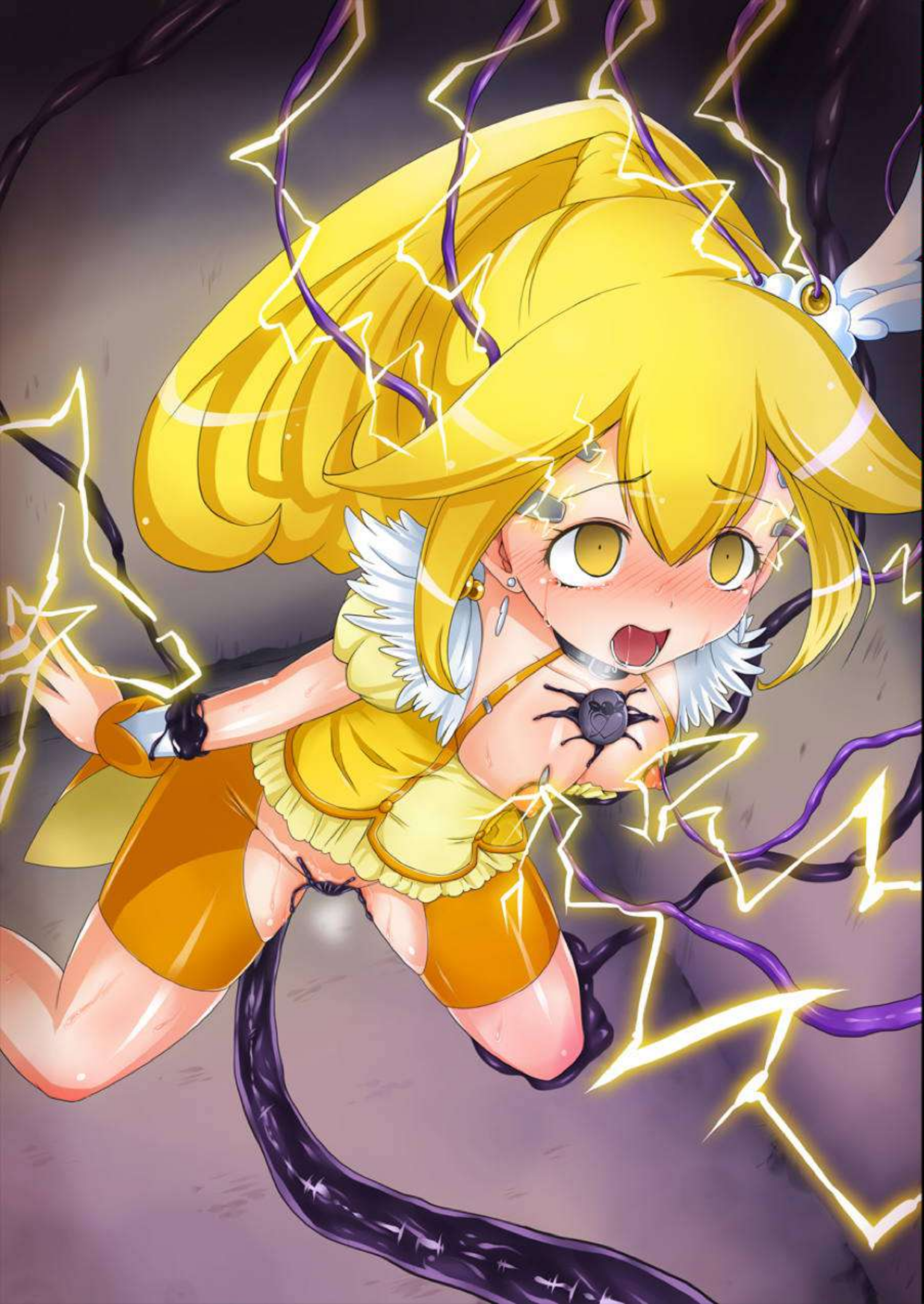
「まったく、次から次へと増えやがってオニ！きりがないオニ！」

不意に黒いもやに包まれ気を失ったやよいが気付くと、そこは薄暗い石造りの殺風景な部屋でした。

「え…あれ…？わたし…どうして変身して…この格好なにっ！？」

四肢をガッチリと拘束されて身動きが取れないまま、キュアピースはバッドエンド王国の根城に連れ込まれてしまったのです。

「さっきはジャンケンにも負けて散々だったオニ。鬱憤を晴らさせて貰うオニ！」



「いやっ！放して！こんな格好やだぁ！」
大事なところを隠す気のない、戦士としての尊厳を汚すかのような改造コスチュームに羞恥の表情を浮かべるピース。反撃を試みようと両手に力を込めますが…
「あっ、え、あ、いっ…きいいいいいいいいいいい！」
バリバリバリバリバリ！
乳首や頭に繋がれた電極へと電気が流れ、激痛と痺れがピースの身体を襲います。
「ガハハハハ！まったく学習能力がないオニねぇ」

「力の支配権はこちらにあると言ったはずオニ。他のプリキュアにバレると厄介だから普段は簡便してやるオニが、こうして調教を受けている間はおとなしくしてもらうオニ」

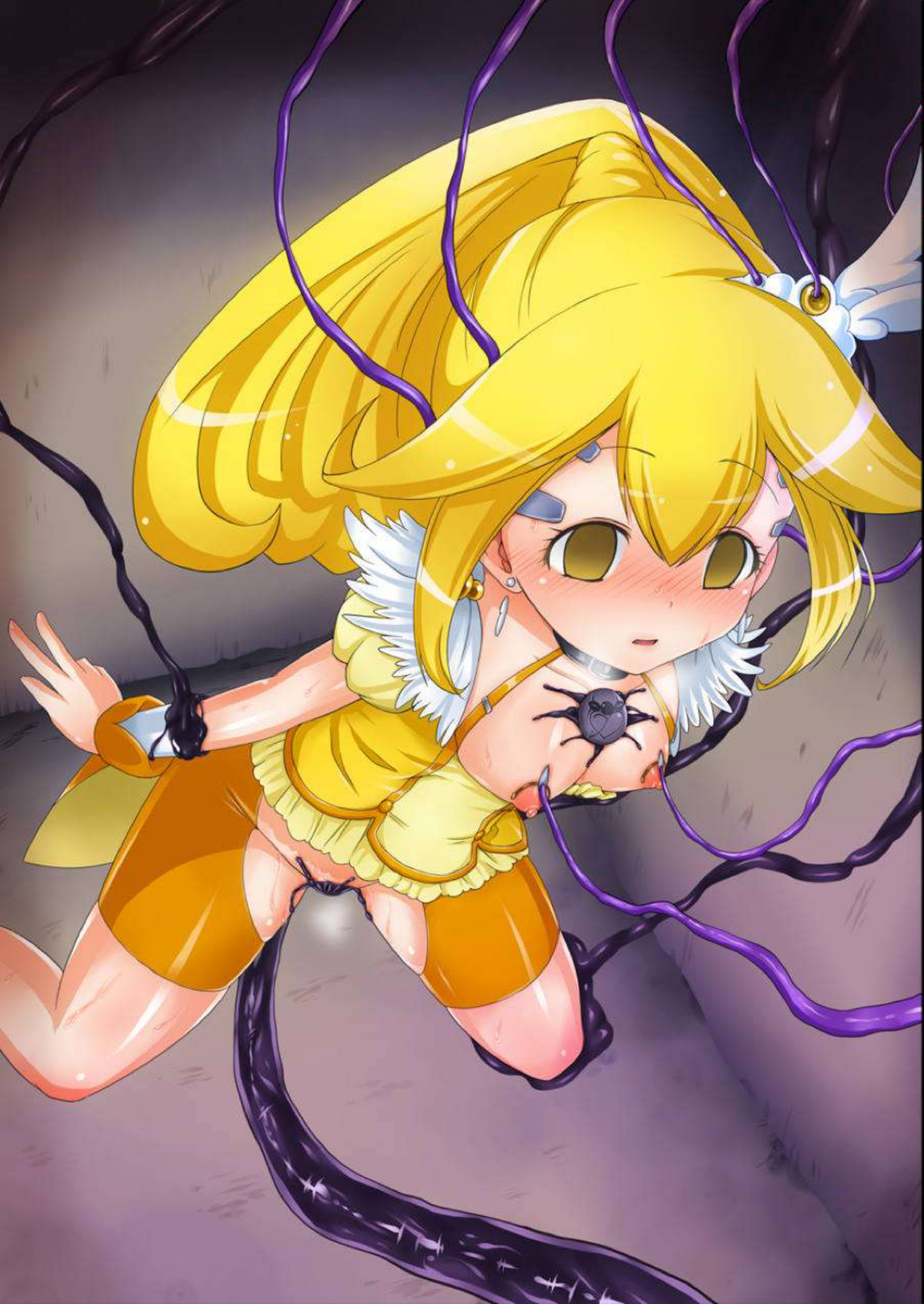
「そん…な…」

力なく頭を落とすピース。先日の調教のせいか、全身に甘い痺れが生じてきます。

「だがまぁ、丁度いいオニ。その雷の力、うまく利用させて貰うオニ」

アカオーニが合図を送ると、ピースの両手先から微弱な電流が流れはじめました。

「ふぇ…？なに、を…するの…？」



「細かいことは知らんオニが、人間の頭の中に流れる電流を『書き換える』らしいオニ」
「あっ…あ、あっ…あー…」
「頭の中に悪の心を芽生えさせれば、きっとプリキュアの力も変質するはずオニ」
ピリッ…ピリッ…とピースの脳内に電気が流され、神経が書き換えられていきます。
「プリキュアも所詮はただの女オニ。まずは性感を司る神経を鋭敏にして、快楽に逆らえないようにしてやるオニ。その後は我々に都合の良い従順な人格を植え付けて、徐々に主人格と一体化させてやるオニ！」

「股間の『それ』も、随分とピエーロ様好みにほぐれてそうだオニね。そのまま感度も一気に上げて、ヒダヒダとイボイボたっぷりの名器に変質させるオニ！」

股間に塗りつけられた絵具がグニグニと動き、ピースに快感を与えます。

「ひぅ、あ、ア、ひっ…あ…」

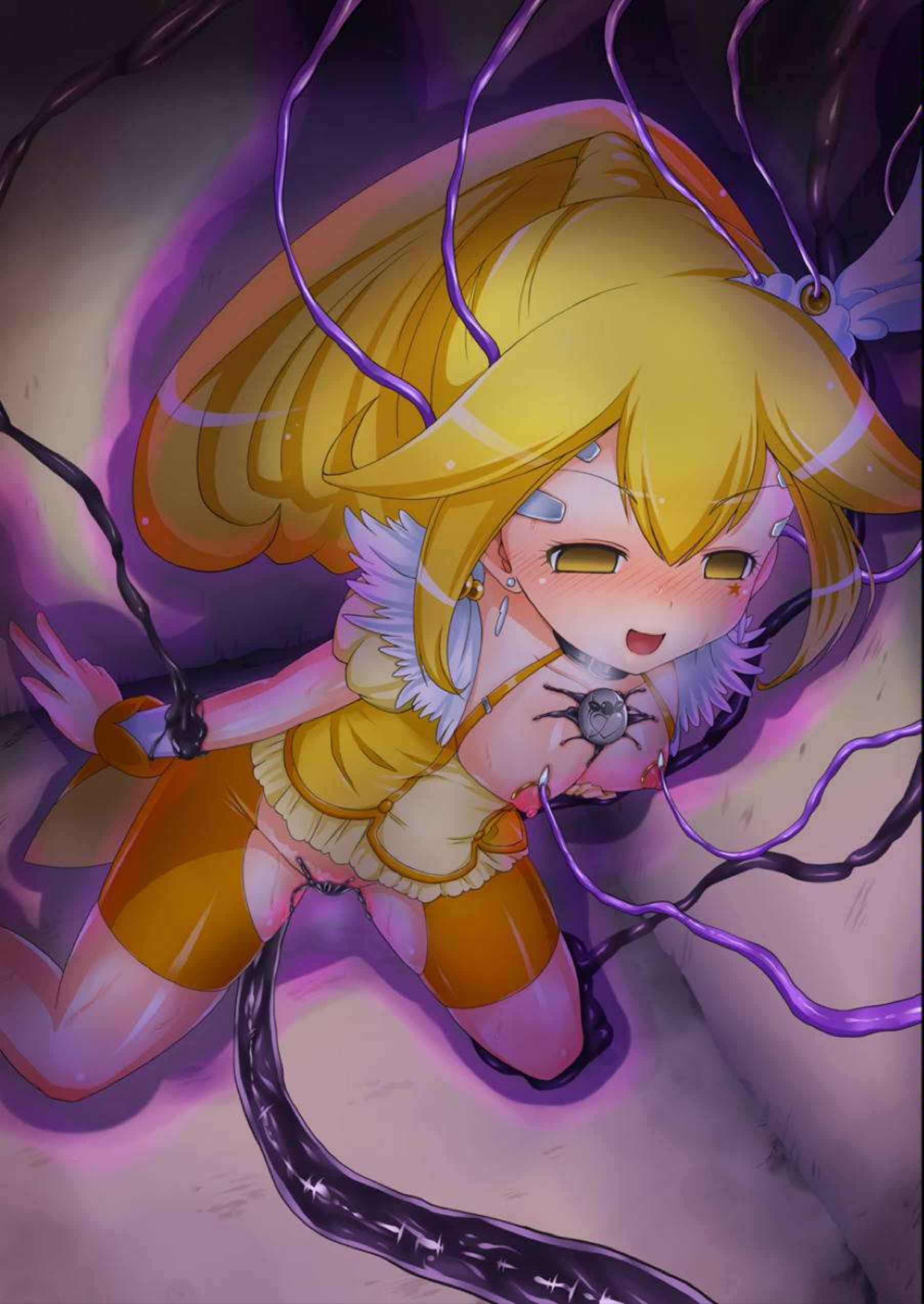
「そうオニ。その快感を脳内に刻みつけるオニ！何度もバッドエンドを迎えて、その身をバッドエナジーで染め上げるオニ！」

神経が焼かれては最接合され、ピースの快楽中枢がどんどん成熟していきます。

「さて、次の段階に移行するオニ」
電流の流れる部位が『大脳辺縁系』と呼ばれる、怒りや憎しみを司る場所に変わります。
「この前お前がいなくなって、仲間は心配してくれたオニか？」
アカオーニの問いに、ピースは力なく首を横に振りました。
「お前が俺様に犯され、調教されていることに、お前の仲間は全く気付いていないオニ」
容赦ないアカオーニの言葉に、ピースの顔が歪みます。何かに耐えるような表情でしょうか。
それとも、何かを憎むときのような表情でしょうか…

「そうオニ！誰もお前のことなんか気にかけてないオニ！」
（わたしの…こと…）
「お前仲間は、とんだ薄情者オニ！」
（みん…な…）
「お前を理解してくれる奴なんて一人もいないオニ！」
（みんな…が…）
「怒れオニ！憎めオニ！プリキュアはお前の『敵』なんだオニ！」

（誰も気付いてくれない…助けてくれない…辛い……苦しい…
こんな気持ちにさせるみんなが…
プリキュアが…憎い…！）



（頃合オニね…）
「お前を理解してやれるのは我々、バッドエンド王国オニ」
「ばっど…えんど…」
「スケベになって持て余した身体を何とかしてやれるのも、我々だけオニ」
「きもちいいこと…する…」
「ピエーロ様は偉大な方オニ。絶対の服従を誓うオニ」
「いだい…なる…ぴえーろ……さま…❤あはっ、あははははははははは！」

「おっと、流石にこれ以上いじると壊れてしまいそうオニね。それにしてもこんな短時間でここまでのバッドエナジーを吸収するとは、恐ろしい奴オニ…」

「ふっ…！あっ…あ…」

電流が止むと、電池の切れた人形のように無表情になって動かなくなるピース。

「いいか、今日覚えたことは心の奥底に刻まれて一生忘れないオニ。元の生活に戻っても、命令一つで悪の心を目覚めさせるオニ。わかったら服従の返事をするオニ！」

（うまくいったオニね…あとは全身をバッドエナジーで満たすだけオニ…）

「はい…わたしの頭のなかに全て刻み込まれました…一日も早く立派な悪のプリキュアになるために、命令さえあればどんな男性にも股を開いて、たっぷりとバッドエナジーを注いで貰います…」

キセ　ヤヨイ　プリキュア

ショウゴウ

„モウヒトリノワタシ„

シンショクリツ

30%

エッチナショジョ

チツ…ミツツボ

シキュウ…コイワズライ

ランソウ…ハラミタガリ

アナル…トロトロ

チクビ…ボッキ

E.クビワ

E.バッドタール　バッドエンド

E.ドウケコクイン　ソウネウ

E.ジャアクナココロ

8カイ

8:35
売春！
囚われた心の行方

プリキュアが五人揃ってからも、ピースの調教は未だ続いていました。
「ようやく見つけたわさ。この『洗脳人格』の奔放さには、ほとほと呆れ果てるわさ」
やよいの監視をしていたマジョリーナは、ようやく彼女を見つけたようです。
「ああやって毎晩のように色んな男とホテル通い…若いってのはこういうものなのかねぇ」
彼女は毎晩『時間』になると、先日の洗脳で植えつけられた好色で邪悪な人格が表に現れるのです。
今日もまた、父親ほども年の離れた男性と連れ立って安いラブホテルへと足を運びます。
「ウフフ…じゃあおじさん、さっそくヤろ❤」

「シャワーも浴びずに押し倒すなんて、まったくやよいちゃんはドスケベだなぁ」
「浴びない方が好きなんでしょ…？女子〇学生の汗ばんだえっちなニ・オ・イ❤」
クスクスと笑うやよいの目は、催眠術にかかったかのように虚ろです。
「よくわかってるじゃないか。それにこのいやらしい下着…け、けしからん…じゃあさっそく…」
「うん…挿入れるね…❤」
ずにゅるるるるるるるん❤
既に前儀も必要ないほどに濡れたやよいの恥部は、易々と男のペニスを咥え込みました。

「おおおっ！こ…このヒダヒダ感…！」
「どお…？感じる？」
黒い絵具によって内部を改造されつつあるやよいの性器は、処女膜を守ったまま何人もの男性のペニスを食い散らかしてより淫らに開発されているのです。
「えへへ…わたしも感じるよ、おじさんのおちんぽ…❤血管は細めで、先太、カリはそこそこ高くて、仮性包茎❤チンカスのお掃除してないから、おま○この壁にこびりついて…あは、きったなぁい❤」

「でも掃除せずそのまま入れたってことは、そっちの方がいんだろ？」
「ふふ、とーぜん。くっさいチンカスでたっぷりマーキングしてねお❤・じ・さん❤」
そう言いながら、亀頭にこびりついたカスを膣壁になすりつけるように腰を動かします。
「あぁあたまらないねぇ。こんな可愛くてエッチな子とセックス出来るなんて」
乱暴なピストンを受けながらも、ガツガツと的確にポイントを刺激し合う大人のセックス。
ここ数週間の間に、彼女の身体は急速に開発されていきました。
「ねぇ、おじさん❤んーーーっ❤」

目を閉じ、唇を突き出してのおねだりキス。中年男性の肉厚な唇と、女子〇学生の小さな唇が重なり合います。

「んむっ❤ちゅう、ちゅ〜〜〜❤」

ぶっちゅりと唇を重ね合わせて、モムモムとついばみ合って、

「ちゅ〜っ❤ちゅっ、ちゅっちゅっ、ちゅむん❤」

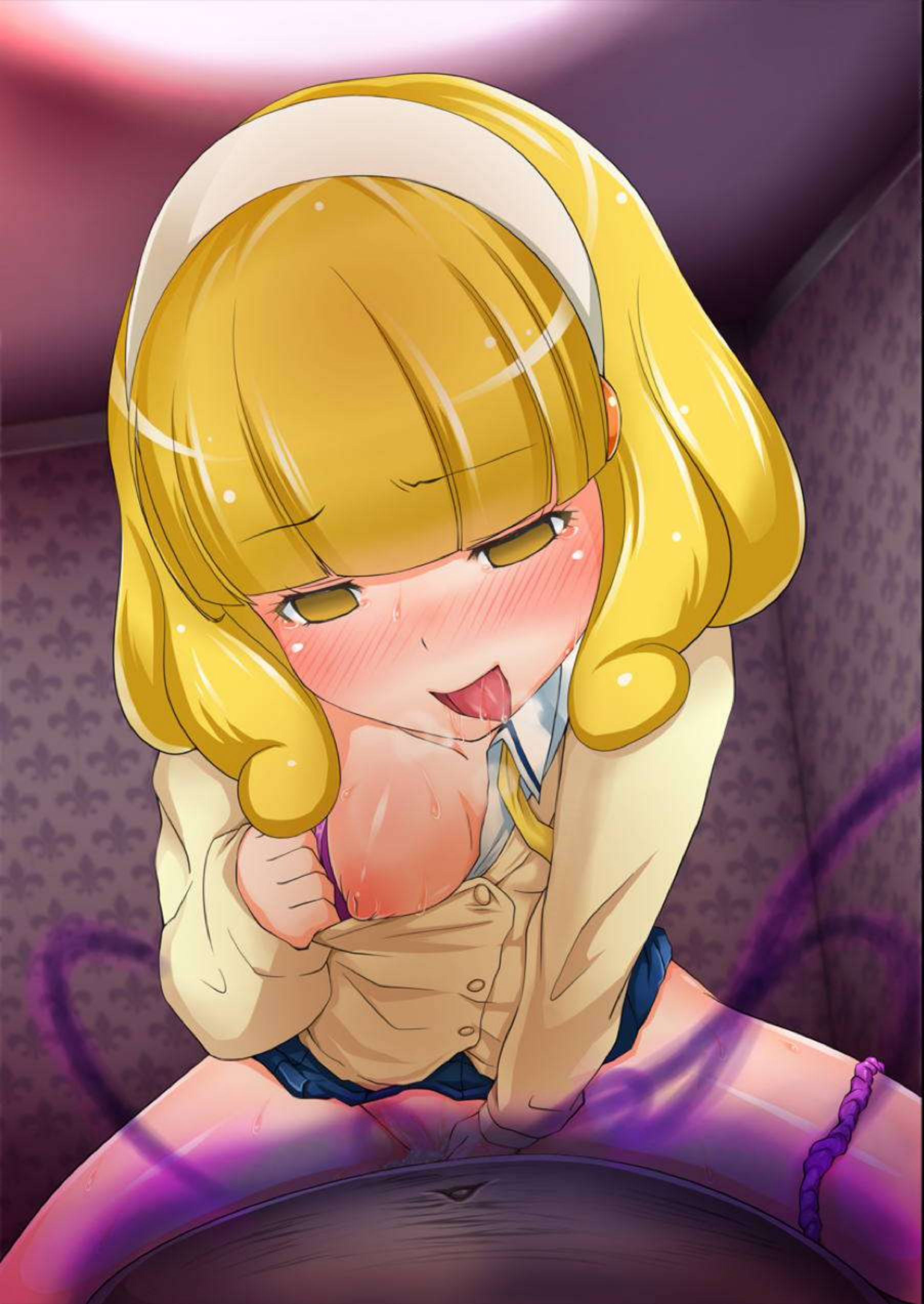
恋人同士のように、優しく甘いリップセックスを交わします。

「ちゅる…やよいちゃん、キスうまいねぇ。どこで覚えたの、そんないやらしい舌使い」

「ふふ、パパたちと何度もえっちしてたら、自然と覚えちゃった❤んっ…れりゅ…」
舌を絡ませ、相手の唾液を貪り合う、濃密なフレンチキス。
「ハハッ！そうかそうか、羨ましい限りだ。それじゃあ私もやよいちゃんの『パパ』に立候補しちゃおうかな？」
「え～？どうしよっかなー❤おちんぽは臭くて硬くてキモチいーからごうかくー❤キスもいやらしくてオトナな感じだし、ごうかくかなー❤あとはー…おこづかいはいっぱい欲しいかも❤」
「そんなことならお安いご用さ！いくらでも援助しちゃうよ！」

「ホント？じゃあわたしのパパ十人目にしたげる❤」
嬉しそうに腰を振るやよい。パチュパチュと愛液の音が響きます。
「そいつは光栄だね。十人もパパがいるなんて、やよいちゃんは本物の淫売だ！」
男も気をよくしたのか、下からズンズンと突きあげます。
「あっひゃあん❤急、にぃ、はげしぃ❤」
互いの性感が極限まで高まり、やよいの膣が痙攣を始めました。
「うおおおおっ！射精すぞっ！女子〇学生のっ！膣内にィ！」

ぶびゅっるるるるるるるうううう！びゅくん！
ぼっびゅ、とぷびゅる、ぶゅるりゅるるるるっ！



「あぁぁぁぁっ！イくイくイくイくイくっ！射精いい！中出しいいのぉ❤」
「うっお…搾り取られる…！」
「あっは❤すっごぉい❤ゼリーみたいなのが流れ込んできて…せーえきは文句なしでごーかくっ❤」
ぐりゅぐりゅと腰と膣壁を動かし、残った精液まで飲み干そうと貪欲に搾り取ります。
「で・もぉ…もうひとつ、パパになるための条件があって…ね…❤」
グオオオオオオオオッ！
不意に男の身体から黒いもやが吹き出し、やよいの膣口に流れ込んでいきます。

「あっれ?だいじょうぶ〜?」
「あがっ…あ…!」
男の体から瞬く間に生気が失せていき、同時に射精が止まらなくなります。
「ふふっ、バッドエナジーを直接吸われる気分はどう?すっごく気持ちいいでしょ❤
これに最後まで耐えられたら、わたしがバッドエンドプリキュアに覚醒したときのための
『直属の部下（パパ）』としてこき使ってア・ゲ・ル❤」
男はやよいの言葉など聞こえていない様子で、腰をふるわせて射精を続けます。

やがて男はぐったりとして動かなくなり、射精も止まりました。
「え～？もう終わり？なっさけなーい❤」
ケラケラと笑うやよいの目には、男への憐憫の情などこれっぽっちも映っていません。
「ふぅ、ごちそうさまー❤そろそろ本来のわたしが目覚める時間だし、今日はここまでにしとこ。
お財布お財布～っと、あったあった。けっこう入ってるじゃーん❤」
やよいは膣口にこびりついた精液をティッシュでふき取り、男の財布を拝借して
そそくさと立ち去るのでした…

「このままバッドエナジーを溜め続ければ、いずれあの子とわたしが一緒に
なる日…キュアピースの最期が来る…『正義のスーパーヒーロー』から
『悪のスーパーヴィラン』に…楽しみだなぁ❤」

キセ　ヤヨイ　プリキュア

ショウゴウ

„キリカヌシンショク„

シンショクリツ

55%

ショジョビッチ

チツ…ヒダヒダメイキ

シキュウ…ビッチマンコ

ランソウ…カイゾウチュウ

アナル…オナホール

チクビ…カナリノボッキ

E.クビワ

E.バッドエナジー　バッドエンド

E.ドウケコクイン　ソウネウ

E.ジャアクナココロ

19カイ

8:34
[redacted]
屈辱の除膜式！
子供じゃなくなった記念日

ここは、バッドエンド王国の地下深く…皇帝ピエーロが眠る封印の間です。
黒い絵具が張り巡らされた空間に、簡素な十字架に磔にされたキュアピースが横たわっていました。
「…っ！また、こんなとこに呼び出して…！」
不安げに辺りを見渡すピースに、ウルフルンが告げます。
「ウルッフッフッフ…お前のお陰でピエーロ様の復活に必要なバッドエナジーも随分と溜まった。
今日はその褒美をやろうと思ってなぁ！」
（ジョーカーの野郎の言うには、ピエーロ様の『一部』だけでも復活できるみたいだが…）

グググググッ！
黒い絵具が一つの塊になり、ピースの股間に向けて鎌首をもたげます。
「ひっ…！あ…」
「ウルッフッフッフ！一部だけだが、紛れもなくピエーロ様だ！お前にもわかるだろォ？このあふれ出んばかりのバッドエナジー！」
（いやっ…！これって…どうみても…おちん…）
「で、だ…今日の『ご褒美』ってのはだなぁ…」

グッ…グチュ…

「うっ、あ゛…！うそ…これ…！」

「ソコも“良い具合”に仕上がった頃合だ、ピエーロ様直々に『女』にして頂きな！」

グッ…ぷ…ぶちゅ、ぶち…ミリッ…！

子供の腕ほどもあるピエーロの肉竿が、ピースの処女膜を破り、深々と突き刺さります。

「あぎっ、い、やあああああああああ！」

ズルルルルルルルッ！ブチュン！

「ひっ…あ…はいっ…て…ぇ」

結合部からツゥ、と紅い雫が滴ります。キュアピースがピエーロの『女』にされた瞬間でした。

「ウルッフッフッフ！こんなギチギチに広がるなんてなぁ！まぁ、精々励むがいいさ」

ウルフルンが部屋から出ると同時に、注送が始まりました。

ずっ…ぷ…ずっちゅ…

「やっ、あ…どうしてぇ……？きもち…いい」

ボウ、と音を立てて、ピースの腹部にあの忌まわしい文様が浮かび上がります。

（…ふふ…❤）

ピースは不意に意識が遠のき、身体の自由が効かなくなるのを感じました。

（なっ…！？だれ…なの…？）

「わたしはキュアピース…ピエーロ様に仕える、忠実なる悪の戦士…❤」

（ちょっと！？なに言って…うそ、声が…出ない…！？）

「当たり前じゃない、この身体の主導権は今、わたしにあるんだから❤

そう、洗脳によって心の奥底に刻みつけられた『悪意』が人格を持った、このわたしが…」

クイッ、クイッ、にちゅ…ぐちゅ…

（やああっ！そんな動きっ…！抜いて！抜いてよぉ！）

「な～に言ってるの？せっかく偉大なるピエーロ様に抱いて頂いてるんだよ？こうしてきちんと、いやらしぃ…く腰を動かして、御奉仕しないと」

（知らないっ！そんないやらしい動き、知らない！）

「知ってるはずだよ…❤身体が覚えてる…セックスの快感を…❤」

そう言うとピース（？）は、更に激しく腰を動かします。

ぐちゅちゅちゅちゅ！ずぷずぷずぷっ！

（～～～～～～～～！あっ…！ひぅ…あ……！）

「まぁ知らないのも無理はないか。今までセックスするときは、いつもわたし頼みだったもんね♪」

（わから…ないよぉ…なに、を、言ってるの…？）

「わたしはね、アナタが自分の電流で自分の脳みそを造り替えたときに生まれたの。
アナタがピエーロ様に服従するのを拒んだから、その反動で邪悪な心の塊が出来たってわけ❤」

（あのときの…ってことは…まさか…！）

「そう！アンタが疼いた身体を持て余したときに、わたしが出てきて代わりにセックスしまくってたってわけ❤無意識に抑えつけてられてたからここまで時間がかかったけど、お陰でピエーロ様の復活に必要なバッドエナジーも溜められて、サイコーだったよ♪」

（せっく…しまくったって…そん、な…い、やあああ…）

「何よ、お陰でこんないやらしい身体になれたんじゃない。感謝してよね♪」

（ふざけないで…！かえしてっ！わたしの体、かえしてよぉっ！）

叫んでも、指一つ動かすことができません。涙ひとつ、流すこともできませんでした。

「うるっさい！ピーピー泣きわめくんじゃねぇよ！」

水音と嘲笑だけが響いていた部屋に、苛立ち混じりの怒号が飛びます。

「知ってるんだよ？アンタ、アカオーニ様にケツ穴ほじられて以来、毎晩オナニーしまくってたよね？ネット通販であんなデッカいアナルバイブ買って、ブッ挿したまま学校にいってたことだって知ってるんだからね！」

ギュウウ、と膣を食い締めながら、悪意に満ちた吐露がピースの心を抉りました。

（っ！？やめて！それっ、は…いっちゃだめぇぇ！）

「アンタは根っからの淫乱なの！薄々気づいてたんでしょ？知らない間に自分が見ず知らずの誰かとセックスしてたってこと！マンコにこびりついた精液のニオイ嗅ぎながら、一晩中マンズリこいてたってことも知ってるんだからね！だってわたしは、アンタそのものなんだから！」

ケラケラ、と下品な笑い声がこだまします。

「ホラ…認めちゃいなよ…ピエーロ様のモノになれば…このおちんぽが与えてくれる快楽に素直になれば…ずうっと『セックスに興味津津な変態女子〇学生』でいられるよ…❤」

悪意に満ちた誘い。その間も、身体に快楽が刻みつけられていきます。

（…らない）
「え？」
（ならないっ！アナタの言いなりになんて、絶対ならない！）
「ちょっ、待っ…これ…！」
邪悪な力がみるみるうちに薄れ、『悪意』がその力を失ってゆきます。
（どんなに人に言えない秘密があっても…わたしには、大事な友達がいるんだもん！
悪い心になんて、ぜったいぜったい、負けないんだからっ！）

「プリキュアはみんなの笑顔を守る、正義のヒーローなんだから！
　アナタたちの好きなようには、絶対にならないのっ！」
正気を取り戻したピースが、虚空の闇をキッと睨みつけます。
その耳には、邪悪な声など、もう届いてはいませんでした。
（フフフ、ずいぶんと強情ですねェ～え、プリキュアァ…）
実を潜めて様子をうかがっていたジョーカーも、驚きを隠しきれないようです。
（…？あぁ、そういうことですか。それならこのまま、予定通りに…♪）

ぐっちゅぐっちゅぐっちゅ…ぷちゅ、ずにゅにゅにゅにゅ！

「ひぅ！んっ、あ…こんな、きもちいのに、なん、てっ…まけな…いっ！」

しだいに激しくなるピストンにもなお、ピースは気丈な表情を緩めません。

（ですがァ？身体は確実に、快楽に順応している…♪）

ズチュチュチュチュ、にゅるん！ずぬぬぬぬぬぬ…ずっぶん！

「あっ❤へ、ひぁ…や、まぇ…らい……」

少しずつ腰が浮き始め、身体の痙攣が強まります。

ずっりゅ、ずっりゅ…クププ、ぐぶっ！ごりゅ！

「あっ！や！そっ…こ…！」

この数週間で一番敏感に開発された部位を刺激されたとたん、ピースの表情が崩れました。

（だめっ！ガマン…しなきゃ…！でもっ…ここ…！すっご…い…）

ピエーロも彼女の反応の変化を感じ取ったのか、執拗に責め立てます。

「だめっ、イっ…ぅ、あ…うんんんんむ～～～～～～～～！」

血が滲んでしまいそうなほどに唇を噛みしめながら、ピースは絶頂に達してしまいました。

「あっ、あ…あ～～～！あ～～～～～❤❤」

我慢していた分強い絶頂の波が来たのか、激しく腰を痙攣させながらオルガズムスを迎えるピース。

途端に、彼女の中の邪悪な力が一気に強まります。

「だめっ！出てこないで！何度イかされたって、二度とわたしの身体を好きになんてさせない！」

（あぁ～っ、もう、そういうことじゃァないんですよねぇ♪）

（じゃあお望みどおり…何度でもイかせてあげる❤）

ピエーロのペニスが大きく引き抜かれ、一気に突き立てられます。

どびゅうううううううううううるるりゅっ！
「ひぃやああああああああああああああああああああああああ
びゅるるるるるるるうりゅぷぷっ！
あああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
ビュクン！ビュルン！ぶっちゅ、ビッチュ！
（ふふ…これで…ずっと一緒❤）
びゅくん！びゅぷ、ぶびゅぷ、ビュ、トッピュ、ゴピュ…

黒絵具ごしではない、本モノの子宮に、ゼリーのような固形の精液が注ぎ込まれました。
バッドエナジーをたっぷりと含んだそれは、ピースの子宮内膜、膣壁にべっとりとこびりつき、
生臭い臭いを擦り込んでマーキングします。破瓜血混じりの精液が逆流し、オスとメスの交合の
証がゴプリ、ゴプリと精液だまりを作りました。

（うっ…えぇ…あったかいのが中に広がって…気持ち悪い…よぉ…）

（気持ちいい…よぉ♥）

自分が戦士などではなく、ただのか弱い少女であるというどうしようもない事実に絶望し、
眼尻に涙を溜めるピース。

「うっ…ぐすっ…わたし…負けちゃったぁ…せいぎの…ヒーローなのにぃ…」
ここが敵の本拠地であることも忘れて、えぐえぐと泣きじゃくってしまいます。
「もう…いやだよぉ…いっぱい…えっちなことして…だれ、も…助けてくれ…なくて…ぇ」
（無意識のうちに、ですが確実に、悪意の心が癒着しましたね…）
（もう、プリキュアなんて…やめたい…）
（辛いのも苦しいのも…いや…）
（気持ちいいことだけ、考えたい…）
（予定通り、順調ですよォ♪）

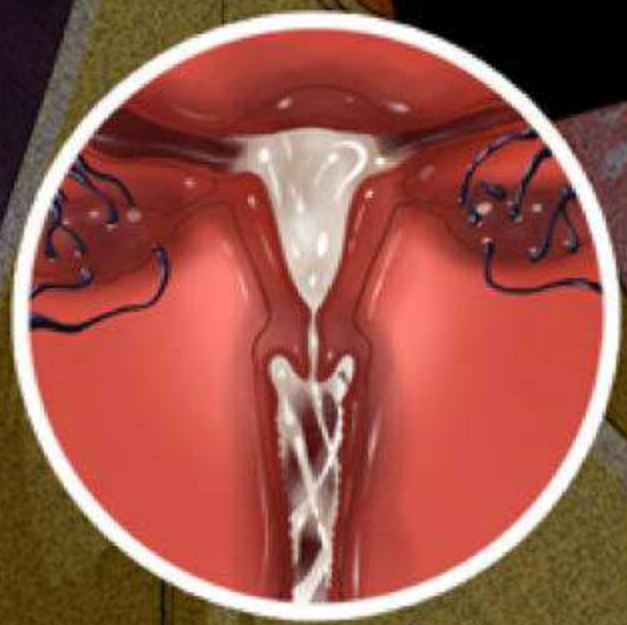
キセ　ヤヨイ　プリキュア

ショウゴウ

„コドモジャナイモン„

シンショクリツ

83%



キズモノショウジョ

チツ…ロストバージン

シキュウ…ザーメンタンク

ランソウ…ヤミノタマゴ

アナル…ケツマンコ

チクビ…スケベイチゴ

E.クビワ

E.バッドザーメン　バッドエンド

E.ドウケコクイン　ソウスウ

E.ヒトツノココロ

44カイ

8:35
背徳の密会！
染めて染められて

キュアピースこと黄瀬やよいが純潔を失ってから数日…
悪の皇帝ピエーロは、彼女が集めてきたバッドエナジーを使って不完全ながら復活を果たし、
毎日のようにやよいを抱き続けています。
今日もまた、人気の少ないトイレで情交が始まるようです。
「い…言われた通り、『これ』、使って…着替えてきました…」
やよいが来ているのは、女学生用水着、いわゆる『スク水』です。バッドエンド王国で所持していたキュアデコルを使わされ、着替えてきたのです。

元来の生地とは若干異なり、しっとりと肌に吸い付いて幼い肢体をにちにちと締め付けます。
便器に跨るような格好でお尻を突き出すと、ピエーロのペニスが顔を出しました。
ぎゅるるる…ぷちゅ、にゅぷん！
「ひっうううううん…ッ！そん…っな、いきなりっ…あぁん！」
前儀もなしに挿入される極太の生殖器。じゅくん、結合部が湿った音を立てます。
「はい…っ…そう、です…もう、さいしょから、濡れてました…っ…あぁっ！」
やよいの耳には、ピエーロの声がしっかりと聞こえているようです。

ドクン…！

（うっ、あ…また、これぇ…❤）

ぞわり、とした感覚と共に、やよいの体からどす黒いモヤが立ち上ります。バッドエナジーです。

「は…い…き、今日は、この『みずぎデコル（スクール）』を、け…汚します…」

やよいの身体から湧き出たバッドエナジーが、キュアデコルに殺到してゆきます。

彼女はこうしてピエーロに抱かれるとき、決まって未汚染のキュアデコルをバッドエナジーで汚染するよう命じられるのです。

こうして汚染されたキュアデコルが、アカンベーを形作る貴重な『核』となるのです。

（うっ…ぐ、う…あ…いや、ぁ…ごほうびなんて…いらないのに…ぃ）

邪悪な仕事を終えたやよいをねぎらうかのように、ピエーロの注送が激しさを増します。

「えっ？あ…はい…確かに、してきました…マジョリーナ……様の作った…指輪…」

やよいの左手の薬指には、黒くギラつく無骨な指輪がはめられています。

（こんな所にはめるなんて…まるで結婚指輪みたい…嫌ぁ…）

気持ちとは裏腹に、指輪を眺めているとだんだん腹部の奥が熱く疼いてきてしまうのでした。

ズズズズズズズッ……！！

「っ！？ひ、い、んいゞいゞいゞいゞいゞいゞいゞ！」

突如、ピエーロのペニスから濃密なバッドエナジーが迸り、やよいの指輪に注ぎ込まれました。

同時に、ピストンもこれまで以上に激しくなります。

「…っえ？えな、じぃ…たりなくなった…ぶんを、ほじゅ…う…？」

（そんなっ！それじゃあどんどんバッドエナジーが溜まっていっちゃう！）

必死に振りほどこうとするやよいですが、どんどん体の中に邪悪な力が入ってくるのがわかります。

ぐぶぬぬっ、すちゅん！にちゅん！

（あっ……あ…先っぽ…ふくらんでる…ぷるぷるって、ふるえて…これ…射精る…イく…！）

腰がひとりでにクイクイと動き始め、ピッチリと隙間なく密着した膣壁が射精を促します。

もはや無意識のうちに行ってしまうそれは、彼女が完全にピエーロとのセックスに『馴染んで』しまったことを如実に物語っていました。そして…

「ひっ！あ、あ…❤おくっ！おくおくおくぅ！ごりごりあたって、ぇ、なすりつけられてぇ❤

だめっ、腰浮いちゃう、出、あ、イっ、くううううううううううううううううう❤❤❤」

人間では考えられない量と濃さの精液が、小さな子宮にびっちゃりとこびりつき、流しこまれます。
全身が悦びにうち震え、頭が真っ白になる感覚。何度も味わったオルガズムスです。
しかし、今回はいつもとは少しばかり様子が違いました。目の前に浮かぶ、薄暗いビジョン…
（あっ…は…え…？なに…これ…）
小さな球体に、何匹、何十匹、何万匹もの『何か』が殺到してゆくビジョン。
（これって…まさか…！らん…）
全身から、スゥッと血の気が引いてゆくのがわかります。

…つぷん❤

（いっ…や…いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやあぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）

……受精……。

女性にとって最大の歓びであり、同時に最悪の恐怖でもあるその瞬間を、やよいは目の当たりにしてしまったのです。

黒い絵具によって浸食されたやよいの卵子は易々とピエーロの精を受け入れ、ギッチリと根を絡ませ合います。同時に指輪へのバッドエナジーの注入も再開されました。

遺伝子レベルで結合した『それ』は、劇的な速度で細胞分裂を繰り返し、子宮内膜にしっかりと根をはってバッドエナジーをまき散らし続けます。
ズニュリ、と抜き取られた結合部からは、水着越しなのにもかかわらず精液が溢れ、受胎のショックで呆然としているやよいの鼻腔をくすぐります。
着床した受精卵からは絶えずバッドエナジーが放出され、ゆくゆくはやよいの身体を完全にバッドエナジーで染めつくすことでしょう。
息を荒げる彼女の口元に添えられた指輪が、花嫁の覚醒を待ち兼ねるかのように光っていました…。

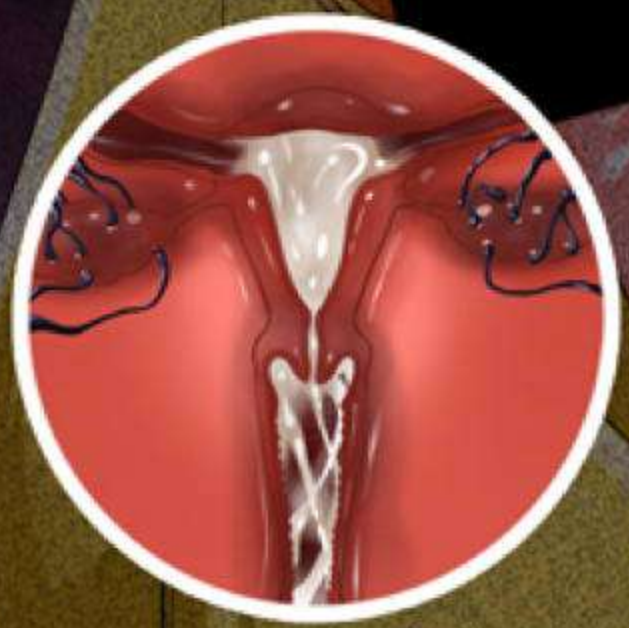
キセ　ヤヨイ　プリキュア

ショウゴウ

..コンヤクユビワミタイ..

シンショクリツ

94%



ルナヨメコウホ

チツ...チョウメイキ

シキュウ...コリダテカイシ

ランソウ...ジュセイラン

アナル...ケツマンコ

E.クビワ　チクビ...スケベイチゴ

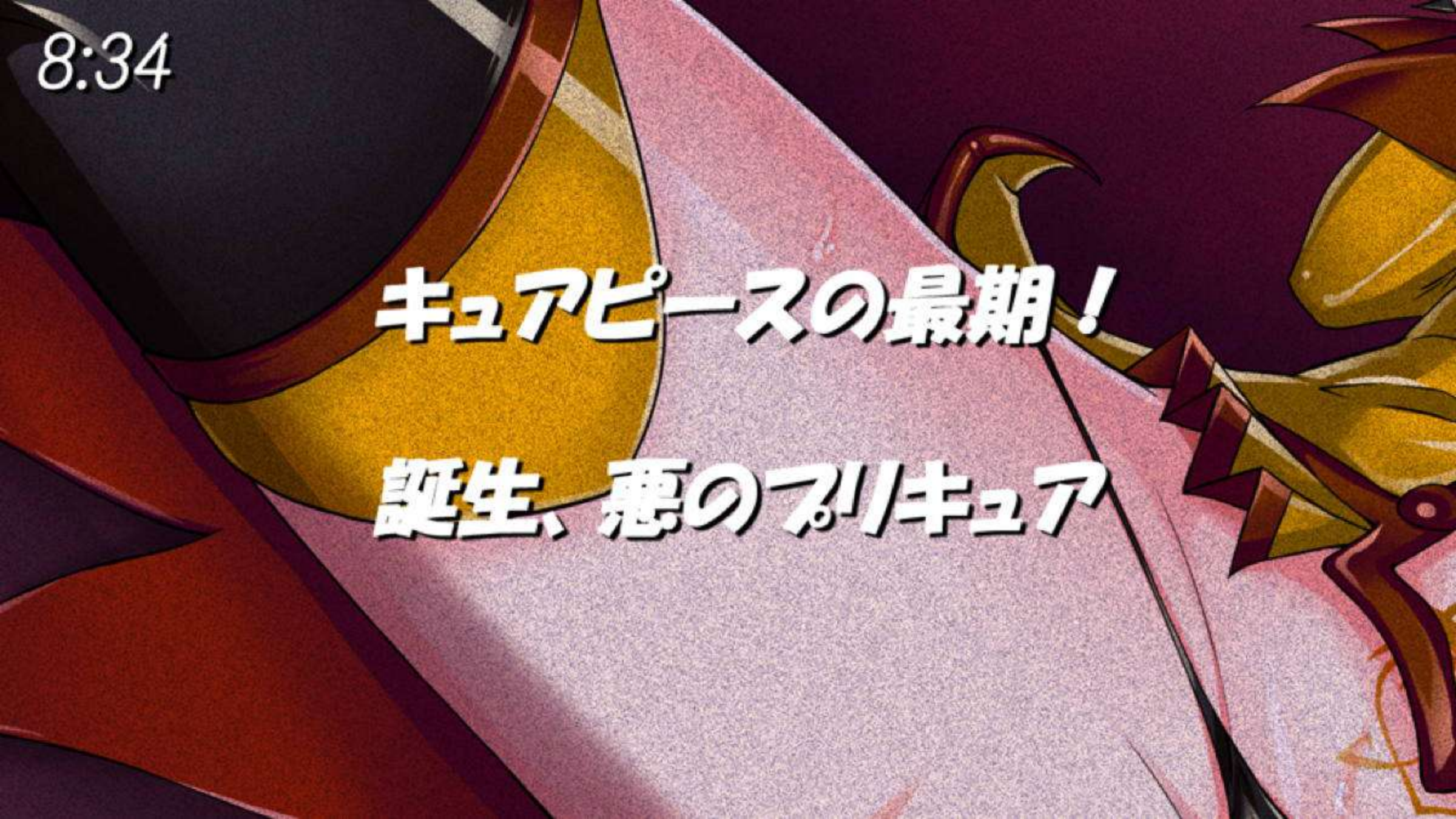
E.バッドザーメン　バッドエンド

E.ドウケコクイン　ソウスウ

E.クロクリマール

53カイ

姓娘完了


8:34
キュアピースの最期！
誕生、悪のプリキュア

やよいのエイプリルフール騒動が終わってしばらく後のこと…
生徒会副会長の青木れいかは、最近やよいがいかがわしい行為に及んでいるという噂を聞きつけ、
後をつけていました。
（う…ん…ここは…確か、やよいさんを追って路地裏に入って…そこで意識が途切れて…）
目を覚ましたれいかの目の前に飛び込んできたのは、禍々しい力を放つ空間と、その中に
生まれたままの姿で佇んでいるやよいの姿でした。
「…！やよいさん…！？なんて格好…！」

級友の破廉恥な姿に動揺を隠せないれいか。そんな彼女に、やよいは冷たく言い放ちます。

「…何しにきたの」

その瞳には、確かな敵愾心が見て取れました。

「何って…最近やよいさんに悪い噂が立っていて…それで…」

「見られたく…なかった…ずっと言えなくて…隠してたのに…！」

やよいの怒気が強まるにつれ、辺りの禍々しさも強さを増します。

あまりのプレッシャーに、れいかは身動きひとつ取れません。

「もういい…もう…どうでもいいや…」
諦めたようにやよいがつぶやくと、彼女の周囲を黒いもやが取り囲みます。
「これは…バッドエナジー…！？そんなっ…！やよいさん！」
必死にもがいてすがり付こうとするれいかでしたが、やよいの放つバッドエナジーによって阻まれてしまいます。
「来ないでよっ！わたしはもう、もう…プリキュアじゃないんだからーっ！」
バッドエナジーが形を成し、漆黒の衣装へと変貌してゆきます。

「その姿…その力…やよいさん、貴女という人は、本当に…！」

「そう、これが今のわたしの姿。みんなには絶対に見せたくなかった、バットエンド王国の一員としての姿…❤」

うっとりとした表情のやよいが、周囲の空間に目を運びます。

「この空間、何だかわかる？わたしのバッドエナジーで徐々に復活しつつある、ピエーロ様の寝所なの。素敵でしょ？」

「ピエーロ…ですって…？」

「そう。復活といってもまだほんの一部だけど、ね」
「いったい何故、そんな事を！？」
れいかの問いに、やよいは遠い目をしながら答えます。
「わたしね…一ヶ月以上前、バッドエンド王国に一人で挑んで、そして負けたの」
「一人でなんてっ！そんな無謀なことを…！」
「れいかちゃんがプリキュアになるちょっと前だったし、それにあの頃のわたし、けっこう調子に乗ってたから…そのまま王国の皆様に、たぁっぷり、躾けられちゃったの❤」

「エッチなこと、いけないこと、たっくさん覚えさせられて、誰にも言いだせなかった…
わたしのバッドエナジーを吸って、ピエーロ様が復活して…
れいかちゃんが気付いてくれたのは嬉しかったけど…もう、手おくれなの」
「そんなこと…そんなことありません！今からでもやり直せるはず、ですから…！」
れいかの必死の呼びかけにも、やよいは冷徹を貫きます。
「ホラ…もうすぐ来るよ…降りてくる…
お腹の…奥…から…！」

…ドクン……！

「あっ…ぎ、い…あ…！」

不意にやよいの様子が急変し、苦しみもだえ始めました。

「やよいさんっ！？どうしたんです、やよいさんっ！！」

腹部が不自然な脈動を始め、全身が痙攣を始めました。

「あっ…ぐ…ぎ」

周囲の瘴気も濃度を増し、れいかは立っていることもできなくなります。

「すご…っ…あ…おりで…っぎだ…ぁ」
涙と鼻水と涎を垂らしながら、何かを待ち望むかのように息み続けるやよい。
そのあまりの凄惨さに、れいかは目を背けることしかできませんでした。
ときおり、ギチギチ、ミチミチ、と何かが蠢く音がやよいの股間から響き、
その不気味な音色がれいかの心をさらにざわめかせます。
「あっ…は…あ…」
（いったい…何が始まるというの…！？）

ぐちぐちぐちぐちっ！びちびちびちびちっ！

「ひっ、い、あ、は、あばれ…ない、で…ぇ❤」

膣口が序々に開かれ、やよいの呼吸も荒くなります。

（これでは…まるで…）

その姿は、まさに赤子を産み落とす母親のようでした。

（本当に…にん…）

「いい゛っ！あ゛！ぐるっ！ぐるぅ！ででぐる…ううううう！」

「あ゛ ❤❤❤❤❤❤❤❤❤」

（あれは…）

恐怖。

（あれは…何…？）

得体の知れないモノへの…恐怖。

「うっ…あ…う、まれ、たぁ…❤わた、し…と、ぴえーろ…さまのぉ……かちゃん…❤」

あれが。あんなモノが。

（あれが…本当に赤ちゃんだと…いうの…！？）

「ほら…れいかちゃん…見てぇ❤わたしとピエーロ様の…愛の結晶❤」
肉塊は急速に変化し、やがて一つの形へと結実します。
「そんな…あれではまるで…！」
「そう❤キュアデコルを産み出せるよう改造されたわたしの卵子と、バッドエナジーをたっぷり含んだピエーロ様の精子が結合したことで生まれた、悪の力の象徴…バッドデコル❤」
バッドデコルから何本もの触手が伸び、やよいの指輪と融合しました。
「さぁ…れいかちゃん、見せてあげる❤生まれ変わったわたしを…『悪のプリキュア』をね❤❤」

プリキュア・バッドネスチャージ！

ムラムラむらりん邪んけんポン♥
バッドエンドピース♥

「バッドエンド…ピース…！？」
変り果てたピースの姿に、れいかは全身から血の気が失せていくのを感じました。
「あははっ、れいかちゃんったら、ヒドいかお～♪」
いつもと変わらぬ笑い声に、しかしどうしようもない違和感を抱かせます。
「すっごぉい…❤バッドエナジーが溢れてくるよぉ…まさに悪のスーパーヴィラン❤」
卑猥極まる衣装に、興奮を隠せない様子のピース。
（早く…早く皆に知らせないと…！）

ぐぬぬぬぬぬっ…ずっ、ずぷんっ！

「あっ❤ひゃあぁん❤ピエーロ様ったらぁ❤」

不意に地面から生えた巨大な肉竿に秘所を貫かれ、嬌声を上げるピース。

「それが…ピエーロだって言うの…？」

「そうだよぉ？わたしの愛すべき『旦那様』❤ここらへん一帯が、全部ピエーロ様なんだよぉ❤」

先ほどから感じていた禍々しい力はそのせいだったのか、と戦慄を覚えるれいか。

「まぁ、せっかく来てくれたんだし、見せつけてあげる。わたし達の『愛の営み』をね❤」

「っ…まるで夫婦のようなもの言いですね…」

「だって事実だもん♪見えない？この指輪❤」

無骨な指輪だが、それは確かに左手の薬指に填められていました。

「あ、さっきから逃げる算段を立ててるみたいだけど、ムリだと思うよ？
　れいかちゃんには全部見られちゃったし、今さらタダで帰すのもちょっとなぁ」

ばつが悪そうにケラケラと笑うピース。

しかしそこには確かに、獲物を逃がさない殺気が見え隠れしていました。

ぐぐっ、ぐ…

「あっ…は❤みて、れいかちゃん❤わたしがイくところ…膣内射精アクメきめて、
すっごくだらしない顔するところ、逃げずにちゃんと見ててぇ❤❤❤」

「あっはあああああああああああああああああああああああ❤❤❤❤❤❤❤❤
いっくイくイくイくイくイくイくイくイくイくイくイくイくうううううううう❤❤❤❤❤❤❤❤❤❤」

どぷ…ごぽ…

「ふっあ…は…きもちよかった…ぁ…❤ピエーロさまぁ…もっとぉ…❤」

「……て…もう…やめて…ください……」

「あっれぇ？なんで泣いてるのぉ？あぁ、そっかぁ、わたしだけピエーロさまをひとりじめして、さみしかったんだぁ❤」

ピースの瞳に、にわかにどす黒い狂気が滲みます。

「ピース…？何を…言って…？」

（ッ！？身体が…動く…）

「ほら、こっちにおいでよ。ピエーロ様といっしょに、わたしもれいかちゃんのこと、
可愛がってあげる❤」

舌舐めずりをしながら淫靡な笑みを浮かべるピースに、れいかは毅然とした態度で臨みます。

「やよいさん…いえ、悪のプリキュア、バッドエンドピース…！
他の皆に類が及ぶ前に…わたくしが止めて見せます！！」

「えーっ？そっちをやるのーっ？いいけど…後悔しても…知らないよ…❤❤」

キセ　ヤヨイ　バッドエンドプリキュア

ショウゴウ

..アクノハナヨメ..

シンショクリツ

99999%

ドスケベマンコ

チツ...オナホール

シキュウ...ハラミバラ

ランソウ...アンコク

アナル...クソアナマンコ

チクビ...ツネニボッキ

E.クロクソマール

E.バッドデコル

E.ダークバクト

バッドエンド

ソウスウ

99999カイ